

音楽科授業案：教科で育みたい人間像
「自ら音楽を愉しむ、心豊かな人」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兵庫, 廣多 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00029496

音楽科授業案

教科で育みたい人間像 「自ら音楽を愉しむ、心豊かな人」

授業者 兵庫 廣 多

- 1 日時 令和4年10月14日(金) 第2時 11:30~12:20
- 2 学級 3年B組 (音楽室)
- 3 題材名 ポピュラー音楽の魅力 —デクシーランドジャズ『聖者の行進』—

4 本題材で願う学び

ポピュラー音楽のルーツである初期のジャズ音楽を演奏することを通して、ポピュラー音楽ならではの演奏表現やその楽しさを実感し、多様な音楽文化についての理解を深めるとともに音楽に対する考え方を広げたり、深めたりする。
(学習指導要領との関連：[思考、判断、表現] A表現(2)ア イ(ア))

5 題材観

(1) これまでの子どもたちの学び

子どもたちは2年時に「民族音楽をもとにしたリズムアンサンブル —インドネシア「ケチャ」—」という題材を通して、リズムによる創作活動を経験した。世界の民族音楽の中には「ケチャ」(インドネシア)の他にも「カッターリー」(パキスタンなど)や「オルティンドー」(モンゴル)など、リズムに特徴がある音楽が数多く存在している。多様な世界の民族音楽を鑑賞した後に「ケチャ」に出会うことにより「リズムが重なるようにして成り立っている」というケチャのリズムアンサンブルの特徴に気づき、自分たちでオリジナルケチャをつくりあげていった。(図1)



図1 オリジナルケチャをつくりあげる様子

音楽アンサンブルの経験が少ない子どもであっても、リズムに注目して演奏したいイメージをもち、感性を働かせながら音に向き合うことで、グループでのアンサンブルを完成させることができた。自分たちの手で音楽を形づくっていく経験は、いままで知らなかった民族音楽を自分たちに身近なものとしてとらえ直し、世界に存在している音楽の多様性に気づく大きなきっかけとなった。このように題材を通して、音を重ねることで人と音を合わせることの楽しさや難しさを体感した子どもたちは、リズムが曲に与える雰囲気や印象

について考えを深めることができた。

3年生になり、旋律づくりがメインとなる創作活動に挑戦した。「カノン進行に合ったメロディーをつくろう」という題材において、昨年度リズムをどう組み合わせるのかについて学んできた子どもたちは「今まで旋律について考えることがなかったから自分でつくることって難しい」「旋律(メロディー)の条件はなんだろう」と旋律という音楽の要素について、自分のことととらえながら創作活動に取り組んだ。(図2) 楽器を使って自分で音を出しながら創作することが難しい場合にはGarage Bandを用いて旋律をつくってよいことを授業者が伝えると、ほとんどの子どもたちはタブレット型端末を用いて創作活動を開始した。その結果、個々の演奏技量にかかわらず、音楽をつくる人の立場になって音楽と向き合うことができた。



図2 旋律をつくる様子

初めは、旋律をどのように創作したらよいかわからなかった子どもたちも、授業者が簡単な音の組み合わせの例を示すと「3つの音でもメロディーになるんだ」と驚いた様子で、題材の奥深さに気づいたようだった。音楽の興味や関心の度合いに合わせて題材と向き合い、自分のつくった旋律をGoogle Classroomにアップロー

ドすることができた。

カノン進行に合ったメロディーをつくる中で、音楽に自分の思いを込めてつくる経験ができたことが今回の創作活動のよさであり、子どもたちは「同じ和音からでも特徴のあるメロディーをつくりだすことができた」「合唱曲風の曲をつくりだすことができた」と音楽の世界を十分に味わうことができた。

一方で、これまで楽器演奏を通して音楽に触れることが少なかったためか、つくった曲に対して「自分が演奏する際のイメージ」をもっていた子どもは少ないように感じた。本来の音楽の営みの中では、つくった音楽をデジタル上の制作物で終わらせることなく、自分や他者が演奏したり、たくさんの人に音楽を聴いてもらったりすることで、より音楽を自分のものと感じ、曲そのものを大切にすることができるのではないだろうか。

そこで本年度は、演奏する人の立場になって音楽の楽しさを実感できる題材として、リコーダーやキーボード等の旋律楽器を用いてジャズ音楽のアンサンブルに取り組みたいと考えた。これまでに学習した、音楽をつくる人の視点を生かしつつ、曲の特徴や演奏スタイルについて考えながら演奏することで、授業で扱う音楽と自分たちの生活の中にある音楽とのつながりが実感できる題材になるのではないかと考えている。

(2) ポピュラー音楽を味わうことの価値

子どもたちはそれぞれの生活経験に応じてピアノやバレエ、ミュージカルなどあらゆる音楽との接点があるが、どの子どもにとっても一番身近な音楽のジャンルはポピュラー音楽（ポップス）だろう。しかし、身近であるにもかかわらず、ポピュラー音楽が発達した歴史やそのルーツについて知る機会は少ない。そこで、本題材を通して、ポピュラー音楽を鑑賞したり実際に演奏したりすることで音や音楽と向き合い、音楽文化について理解を深めるとともに音楽に対する考え方を広げたり、深めたりすることができると考えた。

ポピュラー音楽とは、ロック・レゲエ・ヒップホップ・R&B・ダンスミュージック等に代表されるような大衆音楽であり、多くのポピュラー音楽は互いに影響を与えながら今日まで発展してきた。その中において、どの音楽ジャンルにおいてもその源流となったのは、アフリカ系アメリカ人の文化が発祥となった「ブルース」「ジャズ」「ラグタイム」「黒人霊歌」といったポピュラー音楽である。

その中でも本題材では、ポピュラー音楽を味わうための題材としてジャズの演奏表現を追求していく。ジャズを本題材に選んだ理由は、以下の二つが挙げられる。

①ジャズならではの音楽的要素がある

ジャズには他のポピュラー音楽に通じる、以下のような演奏上の音楽的要素がある。

一つ目はアドリブ（即興演奏）である。ジャズの最大の見せ場というべき部分であり、曲のテーマが演奏された後に少しのブレイク（音の中断）がありアドリブパートに突入する。演奏者は曲のコード（和音）にのっとなって、自由に演奏する部分である。

アドリブに使われる音階にも特徴があり、ジャズでは第3音、第5音、第7音を半音下げた、III \flat 、V \flat 、VII \flat を用いたブルーノートスケール（憂うつな音階）（図3）が使われる。これは、ヨーロッパにはないアフリカ系アメリカ人特有の音階の特徴であり、メジャースケールの第3音、第5音、第7音がヨーロッパ人の感覚から半音下がっているように感じるだけで、実は正確に単音で表記することはできない曖昧な音程である。

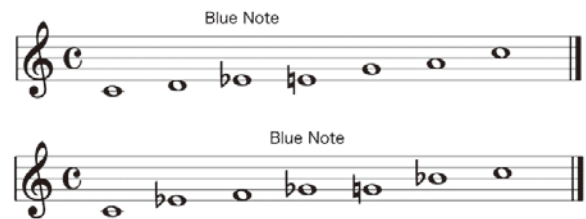


図3 メジャーペンタトニックスケール+ブルーノート（上）とマイナーペンタトニックスケール+ブルーノート（下）

子どもたちは、アドリブを自分たちの演奏に取り入れようと試行錯誤することで、今まで感じたことのない自由な音楽表現もあるということに気づいていくはずである。本題材において「アドリブ」を拡大して解釈すると元のメロディーを崩して演奏するということになる。もとのメロディーからリズムや音程を崩して演奏しても、曲としてかっこよく成立するのがポピュラー音楽の魅力である。「楽譜から読み取る」というクラシックの音楽スタイルとは違った音楽の表現を知ることによって音楽の新たな視点を獲得していく姿を期待する。

二つ目はスイングである。スイングを音楽的に定義することは大変難しいが、演奏上の「ノリ」という言い方が適切かもしれない。ノリのある演奏に出会ったときは、演奏者の息がぴったりと合って、心地よいと感じる感覚や、音楽を聴いていて気分が浮き立つような気持ちを感じることがある。ソロの演奏であっても、正確なテンポ感の中にうねるようなノリを感じ取ることができれば「スイングしている」といえる。

例えば、基本は1分間に60拍というテンポで曲が始

まったら正確にそのテンポが維持されることが望ましいが、テンポが速くなったり遅くなったりするズレが演奏の中で必然であれば、聴く人にとって心地よく聴こえることもある。本題材においてスイングとは、ウキウキと楽しい気分になるようなノリをつくるリズムととらえていきたい。

楽譜上の表記ではスイング記号(図4)を用いて音楽が「揺れる感じ」や「跳ねる感じ」であることを表現することが多い。こちらの記号は表記上、三連符のリズムと似た表記になるがクラシック音楽で用いられるリズムの取り方とは異なるため「タウタ(三連符)」や「タッカ(符点)」のリズムにならないように注意が必要だ。ジャズらしいノリを表現するためには裏の八分音符から表の四分音符の拍に向かう推進力を生かして「ウダー、ウダー」という感じ方で演奏することがジャズのノリを生かすことにつながるだろう。

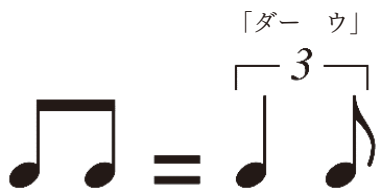


図4 スイング記号

また、ジャズの独特なノリにつながるリズムの取り方の特徴としては「オフビート」(図5)がある。これは通常とは外れたところに強拍があるリズムのことで、Bの部分を強調することにより、独特のリズム感(スイング感)を醸し出すのである。ジャズのリズムの取り方が現代においてもポピュラー音楽全般に息づいているのは興味深い事実である。



図5 オフビートのイメージ

以上のように、本題材では、「アドリブ」や「スイング」という要素を、一人一人が演奏可能な範囲で曲の表現に落とし込むことで、演奏経験が少ない子どもたちであってもジャズらしい音楽を追求していくことができるだろう。実際に演奏することを通して、リズムの取り方や音の重ね方などの、音楽的な要素を感じながら演奏したり、音楽を演奏することで曲の特徴やよさを改めて感じ取ったりすることができるよう活動を進めていきたい。

②文化的・歴史的背景を感じられること

ジャズが生まれた年代はポピュラー音楽のスタート

とほぼ同時期であるため、ジャズを学習することは音楽文化がどのように発展してきたかを知るきっかけになると考えている。

ジャズは、19世紀の終わりから21世紀初頭にかけて、ニューオーリンズなどアメリカ南部の都市を舞台に、そこに暮らす黒人たちの手で、形づくられてきた音楽である。17世紀前半から奴隷貿易によって数千万人のアフリカ人がアメリカに送られたが、18世紀になり大規模農場(プランテーション)が出現すると、奴隷居住地区(黒人共同体)ごとの交流が盛んにおこなわれるようになり、ギターやバンジョーで奴隷生活の抑圧と悲哀を弾き語る「ブルース」という、アメリカの黒人独自の新しい音楽文化が生まれていった。

19世紀後半になるとアメリカの北部新興勢力が奴隷解放を求め南北戦争を巻き起こし、戦いは北軍の勝利に終わった。奴隷の解放とともに、ニューオーリンズには仕事を失ったかつての奴隷が働き口を求めて街にあふれ、同時に質屋のウィンドーには出番がなくなった元南軍の軍楽隊が使用していた楽器が大量に並ぶこととなった。ここに黒人文化と西洋楽器の出会いが実現することになったのだ。街には、コルネット・トロンボーン・チューバ・クラリネット・肩掛け式のドラムにシンバルといった楽器を手に練り歩く人々が現れ、ジャズの原型が完成した。(図6) その音楽が少しずつ黒人らしい音楽スタイル(アクセントのつけ方やリズムパターン)に変化していき、ジャズの歴史がスタートした。



図6 1910年ニューオーリンズの黒人楽隊

ポピュラー音楽のほとんどはアフリカ系アメリカ系発祥の音楽とかかわって発展をしてきており、19世紀によりやく「ブルース」「ジャズ」がそろったといえる。

このように、ジャズの時代背景を紐解くことは現代のポピュラー音楽に通じる音楽の文化的・歴史的背景を学ぶことにつながり、ジャズを題材として授業を行うことはポピュラー音楽ならではの音楽のあり方について考えを深めるために重要な役割を果たすのである。

(3) ジャズ音楽としての『聖者の行進』を演奏すること

『聖者の行進』は20世紀初頭に「黒人霊歌」としてアフリカ系の黒人文化の中で誕生し、今なお世界中で演奏されている名曲である。聖者の行進はデキシードジャズ（ニューオーリンズジャズ）に分類され、初期のジャズのナンバーであることも広く知られている。

では、ジャズの題材として『聖者の行進』を扱うことにはどのようなよさがあるのだろうか。

①曲になじみがあり広く親しまれている

日本では『聖者が街にやってくる』という曲名でも有名で、誰しも一度は耳にしたことのある曲である。子ども自らが「知っている」と思える曲を扱うことで、器楽表現に取り組む際に「自分にもできそう」というポジティブな気持ちをもって活動に取り組むことができるだろう。また、ピアノ、吹奏楽、リコーダー、サクソファンサンプルやジャズバンド等、様々な演奏形態でアレンジされている曲なので、インターネットにアップロードされている様々な演奏動画等を参考にしながら表現の創意工夫に取り組むことができるため、器楽演奏にあまりなじみがない子どもたちにとっても曲に親しみながら演奏表現を追求することができると考えている。

②ジャズの曲としてのノリを味わえるもの

『中学校の器楽』（教育芸術社）の教科書には『聖者の行進』がアルトリコーダーアンサンブルに編曲された楽譜が掲載されている。一般的には、楽譜から音楽の要素を読み取って、アーティキュレーション等を工夫しながら演奏することも大変重要なことであるが、今回はデキシードジャズとしてのノリや、自分たちの表現に合わせてリズムや速度を自由に変化させて演奏することを大切にしながら授業を行いたい。そのためには自分たちなりに曲を変化させることで、さらにより演奏効果が見込まれる曲でなければならない。その点において『聖者の行進』は、旋律が追いかけるように重なるテクスチャ（音の重なり方）や旋律の音を伸ばしている部分にオブリガートを入れやすいなど、旋律を創意工夫する余地がある曲である。また、2拍子の曲であり、リズムの取り方を工夫することにより、スイング感を体得しやすいことも曲の特徴として挙げられる。

以上の点から『聖者の行進』を演奏することがポピュラー音楽と向き合うという点で、適切であると感じている。

(4) 本題材で願う子どもの姿

ジャズを味わいながら曲の表現や音楽づくりを追求していく過程では、演奏の技術の向上よりも、今まで以上に音楽に対する視点が増えていくことを期待している。

表現を追求していく過程では「演奏はまとまってきたが、曲が普通過ぎる。何を交えたらいいだろう」「はたむ感じの演奏にするためにリズムを工夫したい」「楽しそうなノリをつくるにはどのように音をあわせたらいいか考えたい」「人と音を合わせることは難しいな」など、自分たちの演奏に向き合い、よりよくするためにどうしたらいいか試行錯誤することが、音楽の視点をもち感性を働かせながら音や音楽に向き合うことにつながるだろう。

また、演奏を聴き合う場面では、自分のグループと他のグループとの演奏方法やリズムの取り方の違いに気づき、同じ曲を演奏しているのにノリが違うことのおもしろさや、違うからこそそのどれもが素晴らしいのではないかという「音楽の豊かなあり方」を実感することができるだろう。ジャズ音楽の特有の「自由さ」を感じながら、お互いの演奏を認め合うような豊かな感じ方が養われれば本当に素敵だと思う。

このような体験を通して、ジャズを味わった子どもたちは、自分たちだけで音楽のノリを醸し出すことができることに価値を見だし、音楽を演奏する人のすごさや音楽自体がもつエネルギーに気づいていくだろう。そして、題材の最後にいくつかのポピュラー音楽を聴くことにより、題材を通してポピュラー音楽に共通したよさに視点を広げながら、音楽についての考え方を広げたり深めたりしていくだろう。

「ロックのノリとジャズのノリが違う理由は何だろう」「今、自分たちが聴いているあの曲のオシャレな感じはジャズの音楽っぽさからきているのではないか」「自分が好きなアーティストの音楽のよさと、ジャズの音楽のよさの違いはなんだろう」といままでもっとも音楽を身近に感じながら、豊かに音楽を聴くための力が育まれていくと考えている。

音楽を聴くときに大切な感性は、音に丁寧に耳を傾けることによって自他を尊重する豊かな心を育むことにつながると思っている。本題材を通して、演奏することの楽しさにふれ、仲間のジャズ演奏を聴く体験を通してポピュラー音楽ならではの多様さやその魅力を感じていく姿が見られるとよい。音楽を学ぶことを通して、人として豊かになっていくことを願っている。

6 題材構想（全8時間）

- (1) ジャズ音楽との出会い（1時間）
- (2) 楽器のアンサンブルに挑戦しよう（1時間）
- (3) オリジナルジャズアンサンブルを演奏しよう（4時間）
- (4) グループごとに演奏を聴き合おう（1時間）
- (5) ポピュラー音楽を聴いてみよう（1時間）

7 題材構想にあたって

題材の出会いから終末までを通して、ジャズ音楽がもつジャズならではのよさや表現の幅広さを、子ども自身が実感しながら本題材を味わえるように構想を行う。そのために、出会いの場面ではジャズの鑑賞を設定し、ジャズの音楽の特徴や今まで授業で鑑賞してきた曲との違いに気づかせながら、表現活動に入っていくこととする。

また、表現活動自体を題材のゴールとするのではなく、題材の最後の場面でもポピュラー音楽の鑑賞を行うことにより、表現と鑑賞を往還しながら音楽を味わわせ、その特徴やよさについて考えることができるように題材を構想する。

本題材を通して、ジャズ音楽を味わいながら音楽の追求活動を行うことで、他者の演奏のよさを感じながら世の中にある幅広い音楽について目を向け、自分なりの思いをもち、音楽と豊かにかかわる姿を期待している。

予想される子どものあらわれと授業者のかかわりは以下の通りである。

(1) ジャズ音楽との出会い

今回の題材では、これまでに音楽の授業では扱ってこなかったジャズ音楽を鑑賞していく。音楽の授業で曲を鑑賞する曲といえば「クラシック音楽」を連想する子どもが多いので、音楽室に鳴り響くドラムや楽器のアンサンブルやソロの演奏に子どもたちは「いつも聴く曲とは違うな」という新鮮さを感じるだろう。鑑賞する曲は以下の通りである。

- ① 【デキシーランドジャズ】
『聖者の行進』(1930年頃)
ルイ・アームストロング
- ② 【スイングジャズ】
『シング シング シング』(1936年)
ベニー・グッドマン
- ③ 【モダンジャズ】
『ワルツ フォー デビイ』(1961年)
ビル・エヴァンス

鑑賞を行った後に、曲を聴いて感じたことや気づいたことを共有していく。子どもからは「聖者の行進は聴いたことがある」「シング シング シングは吹奏楽の曲で聴いたことがあるぞ」など、自分の生活経験と近い曲に注目し鑑賞していこう。あまりなじみのない曲についても「ワルツ フォー デビイはおしゃれな感じがして大人っぽい」「低音の楽器が弦を弾きながら、自由に吹いているように聴こえる部分がある」というようにジャズという音楽ジャンルの特徴的な音楽の表現に興味を見出すだろう。同じ音楽のジャンルであっても曲の雰囲気の違いがあることに気づき、初めて聴く音楽であってもその幅の広さに興味を見出す子どもの姿に期待したい。演奏できそうな曲に挑戦してこうと授業者がなげかけることで『聖者の行進』の器楽演奏につなげていきたい。

(2) 楽器のアンサンブルに挑戦

まず、教科書に掲載されている『聖者の行進』の楽譜を頼りにしながら、演奏する活動を行っていく。使用する楽器は、キーボード・ピアノ・リコーダー等を使用し2声のアンサンブルに挑戦する。久しぶりに楽器を演奏する子どもたちは「楽譜の読み方がわからないから教えて」「リコーダーの運指は合ってるかな」と戸惑いながらも意欲的に活動に取り組むだろう。

演奏をしていく過程で「鑑賞した音楽と楽譜に書かれている音楽の違い」に気づく子どもたちが出てくるだろう。演奏をする際には、前時に聴いたリズムを真似して演奏する多くの子どもたちは、鑑賞した音楽と楽譜に書かれている音楽の違いに注目していこう。そこで授業者は、演奏してみた感想を尋ねると、リズムの違いがあったという声が挙がるだろう。そこで「演奏にはどのようなリズムの違いがあったか」ということを次時につなげていく。

(3) オリジナルジャズアンサンブルを演奏しよう

全体の共有の中でジャズ音楽を形づくる特徴について意見を出し合うことで「ジャズらしくアンサンブルをするためにはどうしたらいいのか」を追求テーマと

して演奏活動に取り組んでいこう。

ジャズらしい演奏をするための音楽の特徴は、以下のような考えが出てくると思われる。

- ①旋律のリズムの一部を変えて演奏すること
- ②もとの旋律にはない音程を加えて演奏すること
- ③曲全体を揺れるように演奏すること
- ④ドラムが醸し出す雰囲気を生かして演奏すること
- ⑤楽器の音色を変えて演奏する

活動に取り組み始めた子どもたちは手探り状態の中で「ジャズらしさ」について向き合っていくため、鑑賞する時間を再び設けることにより鑑賞と音楽表現を往還しながらじっくりと音楽に向き合っていくだろう。

追求する過程では、必要に応じてジャズがたどってきた文化的・歴史的背景に目を向けられるように「自由に演奏してもかっこよく決まるのはなぜだろう」「楽器の音を混ぜて演奏するときに必要な楽器は何か」「楽しい雰囲気の中で演奏したくなるのはどのような時か」というように子どもの疑問を取り上げつつ、問い直していく。

子どもたちが追求を進めるにあたって、以下のようにこだわる姿が考えられる。

- ①音を合わせる、アンサンブルの楽しさを追求しながら演奏していく
- ②鑑賞した演奏に近づけるように表現の工夫を行う
- ③演奏する楽器の音色にこだわり、自分たちなりの演奏を行う
- ④旋律以外のリズム楽器を取り入れてアンサンブルを行う
- ⑤ジャズらしい音階を用いてアドリブ的な演奏に挑戦しようとする

こだわりをもってジャズ音楽の追求活動を行うことで、自分とグループのメンバーのこだわりのポイントや、音楽を聴いた際に注目した視点が違うことにも気づくはずである。自分と違う価値観をもつ人と同じ音楽をつくりあげることが、音楽の味わいを共有するうえでとても重要なことである。子どもたちからは「自分は気づけなかったが、〇〇さんがよさそうと言っていた音を入れたら、素敵な音の重なりが生まれた」といった新たな発見が起こるだろう。

また、同じ曲を演奏しているにもかかわらず演奏するグループによって曲の雰囲気やノリが違ってくことに気づき、自然と「他のグループの演奏は何に気を付けていて、どのように演奏しているのだろうか」と

自分たち以外の演奏を聴いてみたいという気持ちが生まれてくることにも期待している。

(4) グループごとに演奏を聴き合う

9つ前後のグループがそれぞれ曲を追求してきたので、3グループごとに聴き合う場面を意図的に設定する。聴き合う際には、失敗がないことがよい演奏ではなく、グループで考えた演奏の工夫が表現できるかどうか、また、演奏の工夫を意識して聴こうとすることの大切さを確認してから活動に入っていく。聴き合った中で他のグループのよさを認め合い、演奏のフィードバックを行いたい。

「演奏は緊張したけれど、自分たちが演奏を工夫しようとしていた最初の部分のリズムは表現できたと思う」「自分たちは違うノリで演奏していて、こんな表現もできるのかと思った」というような、前向きな意見交換を期待したい。

演奏を終えた子どもたちは、ジャズらしさについて改めて考え、以下のような思いをもつだろう。

- ・楽器演奏は得意ではないけれど、人と協力して演奏することは楽しいことだと思った。特にジャズは堅苦しくないで誰でも楽しめる雰囲気になるのがいいと感じた。
- ・ジャズを演奏することは難しかったけれど楽しいと思った。ジャズにはソロがあって、自分にしか出せない音や表現を追求していける感じがするのがジャズにしかない魅力だと思った。
- ・演奏したグループの中には全然違う表現を目指している感じのグループもあったので「ジャズ感」の中にもいろいろな感じ方があるのだと理解できた。
- ・その場のノリで曲を演奏しようとしたけれど、あまりうまくいかなかった。楽器や歌でノリを表現できるプロの人はやっぱりすごいと演奏してみて気づくことができた。 など

自他の演奏を大切にしながら表現活動を行うことで、表現の多様性や音楽文化について新たな視点でとらえなおすことができるように、聴き合ったあとの共有を大切に行いたい。

(5) ポピュラー音楽を聴いてみよう

題材の最後にポピュラー音楽の鑑賞を行うことで、音楽文化についての幅広い視野をもつことができるようにしたい。子どもたちはジャズの演奏をしたからこそ感じられることがあるだろう。鑑賞する曲は、比較

的ななじみのあるジャンルや曲であることや、音楽ジャンルが互いに影響し合いながら発展してきたというポピュラー音楽の歴史や時代的な側面を感じられる曲を鑑賞していく。

①【ブルース】

『レッドハウス』(1967年)

ジミ・ヘンドリクス

②【ロック】

『監獄ロック』(1957年)

エルビス・プレスリー

③【ロック】

『ウィーウィルロックユー』(1977年)

クイーン

④【ボサノヴァ】

『おいしい水』(1963年)

アントニオ・カルロス・ジョビン

⑤【ボサノヴァ】(1963年)

『マシュケナダ』

ジョルジ・ベン

鑑賞を行った後に、曲を聴いて感じたことや気づいたことを共有していく。子どもからは「ブルース」と「ロック」の共通点や、同じ「ボサノヴァ」であっても「ジャズ感」を感じ取ったり「サンバ感」を感じ取ったりといった、多様な音楽の感じ方を自由に発言してもらいたい。ジャズを演奏する体験を通して、何気なく聴いていた音楽であっても「〇〇に似ている」「この曲の特徴は～だ」と、曲についての考えを広げたり深めていたりする様子が見られるだろう。

本題材を通して、ジャズ音楽とじっくり向き合い、演奏する経験を通して、ポピュラー音楽についてさらに親しみを持ち、生涯にわたって人生を豊かにしていくこと子どもの姿を育んでいきたい。

参考文献：相倉久人（2007）『親書で入門 ジャズの歴史』新潮社。

水城雄（2000）『誰も教えてくれなかった ジャズの聴き方』ブックマン社。

参考資料：押さえておくべき2つのブルーノートスケールと覚え方

<https://wellen.jp/compose/blue-note/>

ペンタトニック（Pentatonic）とブルーノート（Blue Note）

<https://mistletoemusicschool.com/blog/pentatonic/>